慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	発達障害児支援のための保育士トレーニングプログラムの開発と評価
Sub Title	
Author	松﨑, 敦子(Matsuzaki, Atsuko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2014
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.78 (2014.) ,p.171- 174
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成25年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000078-0171

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

参考文献

井上　優　1993『篠栗八十八ヶ所霊場めぐり』西日本新聞社.
篠栗町教育委員会編　1982『篠栗町誌歴史編』1982, 篠栗町文化財専門委員会.
篠栗町教育委員会編　1990『篠栗町誌民俗編』1990, 篠栗町文化財専門委員会.
庄崎良清　2007『おみくじ―神仏の器となりて―』（藤田庄市・聞き書き）私家版.
鈴木正崇　2013「民俗社会の持続と変容―福岡県篠栗町若杉の事例から―」『人間と社会の探究　慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』76号，pp. 83–140.
中山和久　2008「模倣による巡礼空間の創造―篠栗四国霊場の表象と実践―」『哲学』119集（文化人類学の現代的課題II）慶應義塾大学三田哲学会，65–109頁.
西　義助　1982『ささぐりくらしの四季』私家版.
長谷部八朗　2011「山の聖性と体験修行」宮家準編『山岳修験への招待―霊山と修行体験―』新人物往来社，204–210頁.
読売新聞社出版局・宗教考現学研究所編　1986『九州・篠栗霊場の旅―弘法大師の世界―』東京読売新聞社.
ラモット，シャールロット　2013「巡礼と地域社会に関する方法論的考察―篠栗新四国霊場の事例を通して―」『人間と社会の探究　慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』75号，pp. 67–80.

発達障害児支援のための保育士トレーニングプログラムの開発と評価

松　崎　敦　子

発達に遅れや偏りがあるために，特別な支援を必要とする児童が増えている（文部科学省，2012）。保育所に通園する障害児の数，障害児を受けて入れている保育所の数ともに増加しており（日本保育協会，2010），障害児支援に関する研修の充実が望まれている（高旗・中田・池田，2007）。

そうした現状をうけ，これまでいくつかの研修が実施され，その効果が示されてきた（田中ら，2011）。しかしながら研修の内容は，アセスメント方法，支援計画の作成方法，問題行動への対応方法を中心としたものが多く，支援技術に関する研修はほとんど行われていない。支援技術の向上には臨床場面における実践トレーニングが必要である，という海外での研究成果を踏まえると（Rose & Church, 1998），今後，実践トレーニングを含めた研修プログラムの開発が求められる。

松﨑・山本（査読修正中）は，児童発達支援事業所に勤務する保育士2名を対象に研修プログラムを作成し，その効果を検討した。研修は，講義（3時間），実践トレーニング（30分×15回），ビデオフィードバック（1時間×10回）で構成した。その結果，保育士の支援技術が向上し，介入終了から2ヶ月後の事後評価においても維持されたことが示された。また，参加児の発達も複数の評価指標において示された。しかしながら，保育所に勤務する保育士に，長期間・長時間の研修を実施することは，時間的制約が多い現在の勤務状況では困難である。

そこで本研究では，S市発達障害者支援センター（以下支援センターと表記する）と協同して，公立保育所に勤務する保育士を対象とした研修プログラムを作成した。S市公立保育所に所属する保育士11名とS市内の児童発達支援事業所に勤務する保育士2名を対象に研修を実施し，研修の効果を検討した。

方　　法

（1）　保育士

S市公立保育所に勤務する保育士11名と，S市内の事業発達支援事業所に勤務する保育士2名の計13名が参加した。参加者は男性2名，女性11名で，平均年齢は27.5歳，平均保育士歴は7.5年であった。保育所に勤務する11名の保育士は全て非常勤勤務の加配保育士で，事業発達支援事業所に勤務する2名の保育士は常勤で勤務していた。

（2）　参加児

3歳から6歳の男女13名（平均4歳7か月；範囲3歳11ヶ月–6歳5ヶ月）が参加した。診断は自閉症スペクトラム障害が12名，ダウン症が1名で，新版K式発達検査（生澤・松下・中瀬，2002）における平均発達年齢は2歳5ヶ月だった。

研修プログラム

研修プログラムは，講義4回と実践トレーニング1回で構成した。講義は1回3.5時間で，6月，7月，9月，11月に著者および支援センター所長が実施した。実践トレーニングは第3回講義終了後に，著者が参加者それぞれに対し実施した。4回の講義は全て支援センターで実施し，実践トレーニングは参加者および参加児が所属する保育所または事業発達支援事業所で実施した。

（1）　講義

<u>第1回講義</u>：幼児期の言語発達，社会性発達，運動発達等を発達年齢ごとにチャートにまとめ，発達年齢に即した遊びや発達支援方法を，ビデオ映像とともに説明した。

<u>第2回講義</u>：行動の機能分析，課題分析，指導計画書の作成方法，支援技術リストの各項目について説明した。支援技術リストは，(a) 先行事象の工夫，(b) 行動への関わり，(c) 強化の方法について，全20項目で構成した。

<u>第3回講義</u>：第2回の講義で説明した内容を，著者および支援センター所長が実際の個別支援場面ビデオを用いて具体的に説明した。更に，参加者を2グループに分け，参加者それぞれが作成した指導計画書の内容をグループ内で発表し，内容を討議した。

<u>第4回講義</u>：実践トレーニングを終了した参加者の実践トレーニング場面のビデオを上映し，解説した。

（2）　実践トレーニング

実践トレーニング開始前の15分間，著者と保育士でミーティングを実施した。ミーティングでは，著者が保育士から参加児の課題，得意な事と苦手な事，問題行動の有無などについて聞き取り，実践トレーニングで実施する活動と目標を決定した。その後，30分間の実践トレーニングを実施した。実践トレーニングでは，まず保育士に参加児と5分程度関わってもらい，著者はその様子を観察しながら，参加児を後ろからサポートしたり活動の準備を手伝った。その後著者が参加児と主に関わり，支援のモデルを見せながら観察のポイントや理由を説明した。実践トレーニング終了後，再び著者と保育士で15分間ミーティングをし，活動の内容と支援の効果について話し合った。

評価方法

（1） 保育士に対する評価

（ア） 支援技術の評価. 研修実施前に事前評価を，介入終了から1ケ月後に事後評価を行った。事前評価および事後評価では，参加児との個別的関わりの様子を15分間ビデオ撮影し，そのビデオ映像を5分毎のビデオクリップにした。各ビデオクリップに対し，支援技術リストの20項目を「できる＝1点」「できない＝0点」として得点化し，得点率［(合計得点÷評価対象項目数)×100］を算出した。その後，保育士毎に各ビデオクリップの平均値を算出した。評価は，研究アシスタント1名と著者の2名が担当し，達成基準は85%とした。

（イ） 知識の評価. 著者らが作成した早期発達支援に関する知識テスト（山本・松崎, 2010）を，介入前後に実施した。知識テストの問題は応用行動分析学の基礎知識，初期コミュニケーション発達，問題行動への対応方法に関して記述式で回答を求めた。知識テストは1問1点，20点満点とした。

（2） 参加児に対する評価

（ア） 日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙（綿巻・小椋, 2004）. 質問紙への記入を保護者に依頼し，参加児の介入前後の言語発達を評価した。本研究では，表出語彙と文法の発達を評価する「語と文法」を使用し，表出語彙，助詞，助動詞，文の複雑さの各項目得点を算出した。

（イ） KIDS幼児発達スケール（大村ら, 1989）. 質問紙への記入を保護者に依頼し，参加児の介入前後の言語発達を評価した。本研究では，発達遅滞児用のタイプTを使用し，全領域合計得点を算出した。

信頼性

トレイニーの支援技術評価は，研究アシスタント1名と著者の2名で実施し，そのうち42%の評価において，一致率を算出した。一致率は，［(2名の評価が一致した項目数÷評価項目数）×100］により算出した。その結果，一致率は98.8%だった。

結　　果

保育士に対する評価

（1） 支援技術の評価

事前評価の保育士全員の得点率平均は66.3%（範囲：29.4～100; *SD*＝*24.6*）だった。事前評価において達成基準に満たしていた保育士は3名で，そのうち2名が保育所勤務，1名が児童発達支援事業所に勤務していた。事後評価では，全ての保育士が達成基準を満たし，保育士全員の得点率平均は96.3%（範囲：91.7～100; *SD*＝*4.4*）だった。

（2） 知識の評価

事前評価の平均値は13.8点（範囲：6～19; *SD*＝*3.3*）だった。事後評価では12名の得点率が上昇し，事後評価得点の参加者平均値は18.3点（範囲：11～20; *SD*＝*2.4*）だった。

参加児に対する評価

（1） 日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙

表出語彙項目では，8名の得点が上昇し，平均値は事前評価212.2（*SD*＝*197.6*）から事後評価302.3

(*SD*＝*260.3*) へと上昇した。助詞項目では，7名の得点が上昇し，平均値は事前評価3.5 (*SD*＝*5.1*) から事後評価6.5 (*SD*＝*8.8*) へと上昇した。助動詞項目では，4名の得点が上昇し，平均値は事前評価3.5 (*SD*＝*4.6*) から事後評価5.3 (*SD*＝*7.8*) へと上昇した。文の複雑さ項目では，5名の得点が上昇し，平均値は事前評価9.1 (*SD*＝*12.1*) から事後評価9.6 (*SD*＝*12.8*) へと上昇した。

(2)　KIDS幼児発達スケール

全領域合計得点は，10名の得点が上昇し，平均値は事前評価211.1 (*SD*＝*75.4*) から事後評価244.8 (*SD*＝*87.5*) へと上昇した。

考　察

本研究では，13名の保育士を対象に，新たに作成した研修プログラムを実施し，保育士の知識および支援技術に関する変化と，発達に遅れのある参加児の変化を検討した。

研修の結果，保育士の支援技術は向上し，全ての参加者が達成基準を満たしたことが示された。実践トレーニングは，各保育士に30分間実施したのみであったが，講座において参加児の発達状況を明確にし，ターゲット行動を決定し，そして支援計画を立案していたことで，非常に効率的に実践トレーニングを実施することができた結果だと推察する。また，応用行動分析学に基づく発達支援に関する知識も，事前評価の点数の高低に関わらず，参加者13名中12名得点が向上したことが示された。

一方，参加児のコミュニケーション発達と社会性の発達が質問紙によって示された。しかしながら，保育士の変化と参加児の変化との関連性に関しては，本研究では明らかにされていないため，この点については今後の検討が必要である。

特別な支援を必要とする子どもが増えている中，今後は地域全体で子どもの発達を支援する環境作りが必要になる。今後も本研究で示された研修プログラムを発展させ，地域における効果的な研修のあり方を検討していく。

参考文献

生澤雅夫・松下　裕・中瀬　淳 (2002). 新版Ｋ式発達検査2001. 京都国際社会福祉センター.

松﨑敦子・山本淳一 (査読修正中). 保育士の発達支援技術向上のための研修プログラムの開発と評価.

文部科学省 (2012) 特別支援教育資料 (平成23年度). 文部科学省，2012年6月，http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2013/10/04/1322974_1.pdf (2014年5月1日閲覧).

日本保育協会 (2010). 遅れのある子どもの支援に関する実践調査報告書. 日本保育協会，2010年，3月，http://www.nippo.or.jp/research/2009.html#h21_f (2014年5月1日閲覧).

大村政男・高嶋正士・山内茂・橋本泰子 (編) (1989) KIDS幼児発達スケール〈タイプT〉. 発達科学研究教育センター.

Rose, D. J. & Church, R. (1998). Learning to teach: The acquisition and maintenance of teaching skills. *Journal of Behavioral Education*, 8(1), 5–35.

高旗正人・中田周作・池田隆英 (2007). 保育者養成に対する社会的要請の調査研究. 中国学園紀要6, 149–160.

田中善大・三田村仰・野田航・馬場ちはる・嶋崎恒雄・松見淳子 (2011) 応用行動分析の研修プログラムが主任保育士の発達障害児への支援行動に及ぼす効果の検討. 行動科学，49(2), 107–113.

綿巻徹・小椋たみ子 (2004) 日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙「語と文法」. 京都国際社会福祉センター.

山本淳一・松﨑敦子 (2010) 慶應早期発達支援プログラム2010〈KEIP10〉. 慶應義塾大学.